神が私に与えた始めての試練

伊藤好保

日本横断の計画を始めて知らされたのは、入部してすぐの5月半ばころだったと思う。その時は、おそろしい事を考える人達だなと他人事のように思っていた。まさか自分が参加しようとは夢にも思わなかった。それが、いつの間にか現実に参加する事になった。やはりこの合宿には男をひきつけるそれだけの魅力が十分にあったのだろう。

今あの合宿を思うと、やはりしんどかったの一言につきる。私は入部したのがおそかったし、保津川へも2回いったきりで他のメンバーよりも練習量がかなり不足していた。合宿にはいる時点で、1ケ月間体がもつかというのが第1の問題であった。自分の体はどうなってもよいが、それによって他のメンバーに及ぼす負担を考えると、正直いって不安であった。それで今回の合宿では、他のメンバーに迷惑をかけないようにと、何度も心に思い必死でついていった。ボッカ、朝の4時、5時起床、沢登りと、どれをとっても下宿であまえた生活を送っていた私には、地獄を思わせる苦しみであった。バテた時もあったが自分では精一杯やったつもりである。

あれほどのつらい合宿になんとかまがりなりにもついていけたのは、すばらしい技術と知識を身につけている先輩達のおかげである事は言うまでもない。それにもう一つ忘れてはならない事に、行った先々での人々の心の温かさと親切があげられる。わりと都会的な所にすむ私にとって、あのような経験は初めてといってもいい。あのような人々がまだ日本に数多くいるという事がわかっただけで、何かとてもうれしかった。

あの長くてつらい合宿が私にもたらしたものは何だったのだろうか。何度も考えたが、はっきりとした答はでなかった。しかし、今はそれでいいと思う。あと何年後、あるいは何十年後にその問いかけはきっと答になってもどってくると思う。

ぼおと・ア・ラ・ファルト

野村秀明

我々の河川に対する活動は、昭和37年に吉野川にファルトボートを浮かべることより始められた。残念なことに、その際吉野川を下り切ることはできず、幾多の危険と困難に断念せざるを得なかった。また、昭和47年には諏訪湖より天竜川をファルトで航行することを試みたが、集中豪雨による異常な増水の為、転覆し、ファルトボートを流失したという苦い経験をも持っている。

そして、今回の合宿では川を遡るという始めての経験をしたわけであるが、合宿前の論点は、もっぱらその辺にあった。遡る手段において、ファルトボートを使用するという点については問題はなかったが、果たして、そのファルトがどれほどの逆上能力があるのか等、まったくといっていいほど見当がつかなかった。

連日、保津川、宇治川へと出かけて、航行能力をテストする。それにより、ある程度の目やすをつけられたのであるが、流れによって、また漕ぎ方によってかなりの差が出てくるため、予定どうり進んでくれるのかどうか、実に不安であった。結果としては、計画どうりの日程でいったわけであるが、内容は、大部分が漕ぐというより引っぱったという有様で、川を遡ることの困難さを痛感させられた。

しかし、富士川とは日本三大急流の一つとして数えられており、かなりの流れがあったわけであるが、もっと流れのゆるやかな川ではゴムボートなどを母体として、かなりの活動が期待出来る。静水などにおいては、まるで水澄ましのごとく、ファルトの特性を遺憾なく発揮してくれる。組み立てると、長さが4 m近くあるにもかかわらず、たためば1.2 mぐらいになり、重さも１７kgと、持ち運びに実に便利である。エスキモーパドリング等のカヌー特有の技術を身につければ、我が関西大学探検部のゴムボートの技術とプラスして、より広範囲な探検活動が出来るものと期待される。

なお、今回の合宿に当たり、ファルトボートに関して、ファルトピアの山本正義氏に絶大なる御支援を承りましたことを報告致します。

隊　務　報　告